

第21回 『教行信証』に学ぶ会 講師:延塚知道先生【ライブ版】

2023(令和5)年4月20日 会場 円徳寺

講題 :『教行信証』 信巻 己証の巻 別序

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海の

ごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

こんにちは今日はたいへん天気がよくて暑いようになりました。なんか沢山お出かけくださいまして大変ありがとうございます。宗祖の教えを宗祖がおっしゃるようにお伝えできればと思っております。私がこう思うとか、ああ思うということはほとんど申し上げていないつもりです。ここにこう書いてますよということを申し上げているだけでありまして、まあ、いろいろご感想を聞かせていただいて、やはり親鸞という人は偉い人だなあと改めて思っているところです。

御住職からありましたように、今はご本山は慶讃法要（宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年）の最中で、この間、東本願寺は一期と二期に分かれて勤められておりまして、一期の一番最後が4月8日でした。4月8日が第一期の慶讃法要の結願日中というので、「話をせよ」と言われまして、ご本山に行ってお話をしてみたい。満堂でね、なんというか、宗祖がいるところですから、御本尊の前で満堂の中でお話をするのはなかなか、やはりちょっと緊張します。けれどもまあ一生懸命話をして、終わってすぐに帰ってまいりました。日帰りです。列車がなかなかないものですから、後藤寺まで車で行きまして6時半の列車に乗って京都に11時ぐらいに着いて、それからちょっとした御齋をいただいて、装束を着替えてお話をし、すぐにタクシーを準備してもらって帰ってまいりました。まあ、何をしゃべったかよく分からないけれども、けど、ああいうのはすぐに文章になりますから、この間文章が来て、直しておきましたけれ

ども、まあ何をしゃべったか分からないけれども、まあまあ「宗祖がおっしゃることはちゃんと
言っているなあ」と思いました（『同朋新聞』2023年6月号に掲載）。

今度は第二期の終わりが4月29日です。この時には、私のような者が大変光栄というか申し
訳ないのですが、「内陣に出仕せよ」と言ってまいりまして、衣もない、私はそんなところに出た
ことがないので。ところが皆さんがいろいろと御懇志をくださったりしているので、新しく作り
まして、そしてまた朝早く出て、終わって日帰りしようというふうに思っています。

先ほど立教開宗というお話がありました。立教開宗につきましては、昨年12月28日、
報恩講の最後の御満座の日に、やはり大師堂（現在は御影堂（みえいどう）と呼ばれています）
でお話をしました。それは「祖徳讃嘆」という親鸞聖人の御徳を褒めるということですから法話
ではいけません。きちっと宗祖の御徳を褒める。それは『大経』、『教行信証』に依ること、そし
て法然の浄土宗独立という仕事を引き継いで、今度は教学として『教行信証』を明確になさった
わけです。いつも私が申しますように、法然上人は「念仏ひとつ」、これを表に立てて浄土宗を独
立させたわけです。ですから本来それでいいのです。どこも間違っていないのです。

ところが皆さんも「念仏ひとつ」と言われても、どうして念仏ひとつなのか、浄土教を勉強し
ていない聖道門の人から見ても、「念仏ひとつ」って、なんで念仏ひとつなのだ、念仏に依って凡
夫が仏になる、そんな馬鹿なことがあるか、という非難が起こったわけですから、親鸞聖人は、
法然上人の「念仏ひとつ」という浄土宗の独立を、今度は学問として引き受けて、教学として、
なぜ凡夫が本願に目覚めて仏になるのか、その道理を『大経』に依って明確に『教行信証』とし
て明らかにしてくださったのが親鸞聖人のお仕事です。ですから法然上人の浄土宗独立のお仕事
の道理の開頭、なぜ凡夫が、自力を生きる者がどうして他力に目覚めていくのか、そしてどうし
て本願力に依って仏になっていくのか、それは『大経』の48願に完備されています。

そうですね、まず自力を尽くしなさいと。この間申しましたように、仏様の教えは「**竊**（ひそ）
かに以みれば、難思の弘誓」、本願は我々の苦しむこの人生を乗せてくださる大きな船であると
おっしゃってくださってある。だから仏様の因の本願が私たちの迷いの苦である、迷いの果である
苦しみの人生を救う。交差している。私たちの迷いの本は「**竊かに以みれば、難思の弘誓は難度
海を度する大船、無碍の光明は**」、仏様の教えは、私たちに光として届くのだけでも、その「**無碍
の光明は無明の闇を破する恵日なり**」（総序）。私たちの迷いの本を見抜いて見破ってくださっ
ている。と言うことは、いいですか、出発点が間違っている。

他の動物と違うところは、人間だけは言葉を持って自我を持っている。だから人間になったそ
の時に仏様の世界を忘れた。だから私たちの出発点が、そもそも仏様の世界に背いているのだから、
いくら努力をしても嘘を重ねて本当にしようというような話で、どれだけ努力をしても苦し
みを重ねるだけになります。お釈迦様はよく見ておられるのです。だから、まじめに頑張りなさいと。

真面目に頑張ったら必ず行き詰るから。真面目に一生懸命頑張ると必ず行き詰まる。ふうてん
の寅さんみたいなものです。みんな真面目でいい人ばかりです。悪い人は一人もいません。けれ
どもいつも喧嘩をしている。それと同じ「王舎城の悲劇」、みんなそれぞれが、それぞれの思惑を
もって一生懸命に頑張っている。ところが結局、頑張れば頑張るほど最後には殺し合いに
までなっていく。そうそう、そうなることはお釈迦様はちゃんと分かっている、最初から。だ
から頑張りなさいと。第十九願、努力しなさい、頑張りなさいと言ってるね。

そして自力がどうしても間に合わないということを通して初めて本願に目覚めていく、他力に目覚めていく。だから十九願から十八願というふうになんと『大経』には、自力を持った凡夫が、どうしたら救われていくのかという道筋が、本願の教えとしてちゃんと建てられている。それを一つ一つ親鸞聖人は『教行信証』の各巻の標挙にして、『教行信証』を読めば世界中の自力を生きる人、あるいは自力で苦しむ人、そういう人たちが必ず助かる道がここにあるのだということを通して公開した。そこに立教開宗という大変大事な意味があると思います。

これまで教の巻、行の巻を読んできました。皆さんご存知のように、当たり前ですけど、お釈迦様の経典、特に『大経』、『観経』、『阿弥陀経』という浄土の三部経、これが経ですね、教えです。ところがお釈迦様は経典を説いているけど、世間話をするために出てきたのではないよね。何とか法の世界、仏様の世界を私たちに手渡したい、そのために経典を説いてくださった。だから「経」というのは、法を明らかにするものである。手渡すためにたった一つ法蔵菩薩が選んでくださった行が南無阿弥陀仏です。ですから「行」も「教」も、これまで皆さんと読んできたところ、もうだいたい半分くらい行っているのです。教、行、これは法を表すと考えていいです。

それに対して信の巻、証の巻、これは今度は法を頂いた私たちの方の問題、だから法ということから言えば、信・証というのは「機」（教法に対する語。仏の教えをこうむるべき対象であり、法に依って救済されるべき衆生のこと）を表す。機に属する問題。ですから皆さんここに来ておられて、いろんな疑問を持ったり、それから「これはどう考えたらいいのだろうか」と言うのは機の問題だから、特に、信・証、ここに私たちの立脚地というか、聞かなければならない機の問題があるというふうにご覧になっていただくといいと思います。

法の世界は「一乗海」、これでした。仏様の海のような大きな覚りの世界に自力無効ということを通して初めて目を開いた。それは海のように広い、覚りを悟ったのではないけれども、海のように大きな仏様の世界に目を開いた一乗海、これが教の巻・行の巻の中心になります。皆さんはお念仏をして毎日を暮らしておられると思いますが、一乗海が分かればどうなるか、それが信の巻の問題です。信の巻の中心は「正定聚の機」ですから、もうちょっと分かりやすく言うと「真の仏弟子」、これが信の巻の最後に述べられていくことになります。つまり一乗海という覚りが分かれば真の仏弟子になる。こういうことになるかと思えます。

まあ、これくらいの見当をつけていただいて、今日から信の巻の別序を皆さんと一緒に読んでいくことにしましょう。あんまり解説するところはもうないので、東本願寺の聖典ですと、210ページ（西聖典註釈版 209、島地聖典 12-54）になります。皆さん声を出して読んでみますか。いいですか、春はやっぱり眠たいのかな（笑）、皆さんいいね、寝れるから。

質問(会場より岡田さん)・・・先生、お話の邪魔をするようで恐縮なのですが一つお伺いをさせていただきます。法の世界を一乗海と仰せられました。それを何故南無阿弥陀仏と仰せられないのでしょうか？（※以下しばらくこの質問に答える形で講義を進められました。）

延塚先生・・・行の巻の中心は南無阿弥陀仏ですね。その南無阿弥陀仏が開いていく世界、行の巻の最初に東聖典 157 ページ（西聖典註釈版 1471、島地聖典 12-3）、お念仏が開く世界を宗祖は明確にここに書いておられます。

「謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。」

大行、大信、これは「念仏もうさんとおもいたつころ」（『歎異抄』第一条）、こう考えてもい

い。大行が「念仏」、大信が「申さんと思ひ立つ心」、とこういうふうにも考えてもいい。だから、南無阿彌陀仏は単独に南無阿彌陀仏としてあるのではなくて、南無阿彌陀仏を私がいただいたのだという立場で、宗祖は『教行信証』をお書きになっている。だから行信、これが私の立脚地であると親鸞聖人は最初にそう言われるわけです。頭で考えると、南無阿彌陀仏をちゃんと書けば、行の巻はそれでいいでしょうと、こうなるわけです。ところがそれは観念論であって、南無阿彌陀仏を頂いた私がいなくて、南無阿彌陀仏が南無阿彌陀仏にならない。「私が」と言う時には、それは「念仏申さんと思ひ立つ心」として、私たちは南無阿彌陀仏を頂くのだと、ここから始まるわけです。

だから、「往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。」「大行とは」、ここからですね、岡田先生がおっしゃたように、「大行とは、すなわち無碍光如来の名(みな)を称するなり。」とこう出てくるわけです。そして「この行は、すなわちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり」。つまり、南無阿彌陀仏には法蔵菩薩のご苦勞とそれに依って私たちを仏にするという徳本、それが南無阿彌陀仏に備わっている。そして「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」。そこに、私たちの方から開くのではないけども、如来の方から「真如一実の功德宝海」、大きな覚りの世界を如来の方から開いてくださるのだと。「だから」、南無阿彌陀仏を普通の修行とか行とかいうのではなくて「大行」。如来の行、「大」は如来です。「大行、大きな行と名づけるのである」。そして、「しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。」本願に根づくものである。

こういうふうにも親鸞聖人は、南無阿彌陀仏を南無阿彌陀仏として考えるのではなくて、南無阿彌陀仏を頂いた者として、その頂いた者のところに、念仏申さんと思ひ立つ心が起こりました、そしてそこには、真如一実功德大宝海という、大きな仏様の世界を念仏の方が開いてくださいました、ここから始まるのが行の巻です。そしてその大きな世界を行の巻では「一乗海」というふうに明らかにしていくのが行の巻ですから、行の巻の中心は一乗海にあると、こういうふうに申し上げたわけです。

ですから、岡田先生がおっしゃるように「南無阿彌陀仏を言わないのか」とおっしゃいましたが、南無阿彌陀仏のはたらきを宗祖は自分の身で頂いて、こういうふうにも述べておられる。そういう述べ方をしておられるので、そんなふうにも考えてみたらいかがでしょう。

質問(岡田さん) ..大変恐縮ですがもう一ついいでしょうか。開顕智慧段というところで…、
延塚先生 ..『大經』のね、はい。東聖典79ページの114と言う文章(西聖典註釈版74, 島地聖典1-70)から開顕智慧段になっていきます。はい、それで?

質問(岡田さん) ..釈尊が阿難に対して「汝、起ちて更に衣服を整え合掌恭敬して、無量寿仏を礼したてまつるべし」と言われます。そうすると阿難が合掌恭敬して五体投地して無量寿仏を礼したてまつったら、無量寿仏が出てこられるわけです。そしてその結果起きたことというのは、無量寿仏の大光明が放たれて世界のすべて、一切諸仏世界を照らし、そのため、世界のすべてが劫水で埋め尽くされて一切のものはその中に沈没して姿を消してしまったかのように無量寿仏の光明で満たされて、ただ見えるのは無量寿仏が一切のものの上高くそびえ輝くのみであると言っています。今先生がお話くださった事はこのことを指して言ってくださってるのでしょうか。

延塚先生 ..一乗海という大きな仏様の世界に目を開いた。その時の感動は…、

質問(岡田さん) ..そのことを言っているわけですね。

延塚先生・・・そうそう、ところがその中に胎生という世界があるのを見てきたかと、お釈迦様がもう一度聞くでしょう（東聖典81頁）。

そうしたら阿難は「確かに見てきました。大きな仏様の世界に目を開いた時に、なぜかよく分からないけど、胎生という小さい浄土があるのを見てきました」と、こう言うわけです。

そしたら、今度は弥勒菩薩が「私も見てきたのですが、なぜ胎生に生まれるか、その理由が分からないから教えてください」というふうに、弥勒菩薩がお釈迦様に問います。つまり、ほぼ覺りを悟った弥勒菩薩でも、自分の仏教にとらわれていくような深い執着については反省できないから、だから、弥勒菩薩が「どうして胎生の世界に生まれていくのですか」と問うわけです。そこが大事ね、弥勒菩薩が問うというところがね。弥勒菩薩というのはほぼ覺りを悟っているのですから。

質問(岡田さん)・・・この顕開智慧段というのは、真実の智慧は胎生を見得るところにあるということを示唆しているわけですね。

延塚先生・・・そうですそうです。だから私たち人間の方は、皆さん念仏生活をしていたら分かるでしょう。一生懸命念仏をするしかないでしょう。だから一生懸命聞法するしかないでしょう。一生懸命華を飾って香を焚くしかないでしょう。それが仏教に触れた者の人間の良心です。良心なのです。

ところが仏様はその良心の中に、どうも仏教を立てようとする根性が混じっている。自力無効というふうに一度仏様の世界に目を開いたにもかかわらず、いつの間にか自分の仏教が正しいと、こういうふうに主張して、そして念仏ひとつだと、念仏が分からない人は馬鹿だと、こういうふうに人を非難するようなことさえ起ってくる。そこに人間が反省できないほど深い人間の自我の執着がある。これは私たちの煩惱が深いから、「如来の智慧海は、深広にして涯底なし」（『大経』下巻・東方偈、東聖典50頁）というように阿弥陀の智慧でしか見抜けない深い自力の執着がある、ということをお教えるのが智慧段の問題です。

質問(岡田さん)・・・一乗海という意味はそこにあるのですね。

延塚先生・・・そうです、いいですか、教・行、これは一乗海。つまり、智慧段というのとは一番最後でしょう、『大経』の、だから私たちの念仏生活が究極的に収まっていく最後の問題。ところが『大経』の下巻には、一番最初に「一心帰命」の回心が説かれていましたね。一心帰命、仏様に帰命する。これは「帰命尽十方無碍光如来」ですから、尽十方無碍光如来の覺りに直結するわけです。だから教・行のところでは一乗海、仏様の覺りは一乗海なのだ。私たちの回心、一心帰命した時には一乗海という大きな世界に目を開くのだと。

ところがいったん目を開いても、今言うように念仏生活は気がついたら、まあ金の計算をしているし、言わなくてもいい人の悪口ばかり言って、よく考えたら前と少しも変わっていない、これはどうしたことだろうと、こんなのではいけない、こんなことでは仏さんになれないからもうちょっと頑張らなくてはいけないと思って一生懸命に念仏する。そこに自分が仏になることを自分で決めていこうと、「植諸徳本」（じきしょとくほん）。徳本というのは、これは仏になるということです。善本は法蔵菩薩のご苦勞。さっきあったね、善本・徳本を念仏というのは納めている。法蔵菩薩のご苦勞と私たちが仏になるということ、それを全部包んでいるのが南無阿弥陀仏やと、さっき言いましたね。

この徳本というのは自分が仏になるということ。それを自分の努力、念仏に依って果たそうと

するようになってしまう。それを植え直す。せつかく頂いた念仏を自分が仏になるというために植え直していく。そこに深い煩惱がある。煩惱がはたらいているということは、これは、人間は良心の塊だから反省できない。一生懸命やるしかない。反省できない。それを仏様の方が見抜いて、そしてこの第二十願は、これはこの間（4月8日に）本山でしゃべったのです。岡田先生よく聞いてくれたね。東聖典18ページ（西聖典註釈版18、島地聖典1-16）、ここに二十願、植諸の願が出ています。ゆっくり読んでみますよ。いいですか。

「たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ。」

こう書かれているわけです。これは分かりますね。私がたとえ仏になったとしても、十方の衆生、世界中の衆生が南無阿弥陀仏の名号を聞いて、「ああ名号が大事だ、念仏ひとつでいいのだ」と、こう思って、阿弥陀の浄土に生まれたいと、こういうふうになんか心にかけて、その次です、「もろもろの徳本を植えて」、これが自分の努力をして自分で仏になろうという根性を植えて、そして「心を至し回向して」、心を至し回向してとは、これは自力の回向です。いいですか、勉強する人は良く知っておきなさい。この「至心回向」と言う言葉は、第十八願の成就文とこの二十願のここしかない。だから、第十八願と二十願とは重なっているのです。今はちょっとそれを言う時間じゃないから飛ばしますが、要するに自分が仏になりたいという根性で一生懸命真心を込めて念仏を回向して、浄土に生まれたいと思っている人に、「果遂せずんば、正覚を取らじ」と。救い取らなければ私は仏にならないと、こう誓っている。つまり、「仏にするのは私だ」と言っている。「何をお前勘違いして自分で仏になろうとしているの。果たし遂げるのは私（仏）でしょう」と。だから、自分で念仏を入れ直して、そして一生懸命頑張るって、きれいな身になって仏さんにならないといけなみたいなことを思っているかもしれないけど、それは如来の仕事を盗んでいるのだと。だから、せつかく仏教を聞いて、仏教が分かったという人の中に、どうも暗い顔をしている人がいる。その人はどこかで勘違いしている。けれども、人間の方からは分からない。それは第十八願の大きな智慧でしか分からない。

だから阿弥陀の方から、その深い執心を見破って、そして「あなたたちを仏にするのは私ですよ」と。「果遂するのは私です」と。「自分たちで仏になるのではないよ」と言って、「如来の仕事を盗むな」と。「如来の仕事から手を放しなさい」と。要するに「凡夫に帰れ」と。「きれいな凡夫に帰って、群萌（ぐんもう）の一人に帰りなさい」と。「心配するな」と。「あとのことは私（仏）に任しておきなさい」と。ただのじいちゃんに帰って、「ああ今日は元気に手が動いている、ああ今日は元気で飯がうまい」。それを喜んで、「ありがたい、うれしい」と言って、「仏様の世界を喜んで生きていきなさい」と。「果たし遂げるのは私です」と。

これが『大経』の一番最後のところに説かれている智慧段の問題です。だから、そこで初めて「群萌の仏道」というものが完成することになります。岡田先生は今そのことを言っているのです。それは念仏生活の究極的な問題です。これは回心の究極的な問題です。回心のところにある問題と念仏生活のところとは少し分けて考えてください。世親も言っているでしょう、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」（『浄土論』「願生偈」）と。これは「一乗海」とか「功德大宝海」に直結する。如来の覚りに直結する。

ところが念仏生活は、念仏生活をしていて、一つひとつを「ああこんなことでいいのだろうか」と思うのは、浄土に説かれているからです。浄土に一つひとつ説かれているでしょう。この

前も言った。「コロナで食いすぎて死ぬぞ」と。僕も糖尿になりかかっている。「飯ばかり食ったら死ぬぞ」と。「ちゃんと仏法を食べ物にきなさい」。浄土にそう説かれている。浄土の食功德ではね。そして仏法を食べ物にしたらどうなるかと言うと、「本願をわが命とする」。そうなるのだと。だから、北陸の魚がうまいとか、産地がいいとか、娑婆ではあるかもしれない。しかしそんなことばかり言っていたら死んでしまうぞと。「ちゃんと仏法を聞け」という声が聞こえるから、「あゝ、こんなことではだめなのではないやろうか」と、念仏生活の一つひとつが反省させられる。それは全部浄土に説かれているからです。食うことから、着ることから、住むことから。花やら草やらが浄土にはある。みんなのちは共感しているのに、共感しているのちを忘れていでしょう。頭だけ正しいと思っているでしょう。そんなことない？ みんなのちは感応道交し合って、見て、今日は藤が咲いているでしょう、牡丹が咲いているでしょう、あれを見たら嬉しくなってくる、「うわあ」言って。あれはちゃんといのちといのちが感応道交しているから、それこそ仏様の世界です。だからいのちというのは本願が感応道交しているのだというふうに、浄土で一つひとつちゃんと二十九種類の形で生活を照らしているのが浄土です。

だから念仏生活のところで問題になるのは「願生安楽国」です。世親は二つに分けて言っているでしょう。「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」、「願生安楽国」。というふうに、二つあることをひとつにして考えない。ひとつにすると、頭がいい人はすぐにそういうことを考えるから、ひとつにすると訳が分からなくなります。だから念仏生活のところで考えるのは、浄土を考えてください。一乗海を考えたらだめです。わからんようになる。いいですか。

質問(会場より伊藤さん)・・先生、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」の一乗海と念仏生活を分けて考えるというところで、『教行信証』の行巻のところで「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」とあって、「称南無阿弥陀仏」ではないというのはそういうことなのですかね。

「大行とは、すなわち阿弥陀仏の名を称するなり」ではなくて、「無碍光如来の名を称するなり」とあるのは、念仏生活と回心というのを分けて考えるということと関係があるのですか。

延塚先生・・いやいや、関係があるかどうかはそこだけでは分かりません。それはなぜそうなっているかという、それは『論』・『論註』に依っているからです。『論』・『論註』は『大経』に依っています。だから『論』・『論註』に依って説こうとするときには「帰命尽十方無碍光如来」、それなのです。だから、そこに「無碍光如来の名を称する」と言うのは、『論』・『論註』に依って言っている。ところが皆さんと読んだときに、世親の『浄土論』の引用は「我依修多羅～」から引用していて、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」の大事なところは抜けていました。それは龍樹のところできっちと押さえていました。なぜかということはそので言いました。もし、世親の「帰命尽十方 無碍光如来」をそこで言っているなら、『教行信証』は(聖道門の)菩薩道と変わらなくなってしまうから、だから、「帰命尽十方 無碍光如来」を明らかにしたのは世親です。にもかかわらず、世親のところではあえて、それを省いて曇鸞の「五念配釈」(『論註』、菩薩道から凡夫の仏道へ)のところに「帰命尽十方 無碍光如来」を出している。そう考えてください。

七祖で一番最初に「南無阿弥陀仏」と、機の自覚を明確に表したのは曇鸞の讚嘆門です。だから親鸞の立脚地は曇鸞のところにある。だから、そこにあるのは、曇鸞の讚嘆門の帰命尽十方無碍光如来と言っているのであって、一心帰命と一心願生を分けている理由にはならないと思います。他になにかありますか。

質問(岡田さん)・・・宗祖は教巻と行巻を一乗海で御まとめになりました。行巻の方の最後に「本願一乗海を案ずるに」（東聖典200頁）として宗祖は書いておられます。これに宗祖はまとめられたということですね。これが宗祖の視点だということですね。

延塚先生・・・お立ちになった覚りですね。お立ちになった立脚地ですね。

質問(岡田さん)・・・そうですね、それで先生は一乗海ということをお出しになったわけですね。

延塚先生・・・そうです。というか、僕が出したということではなくて、そうなっているのです。行の巻は一乗海が中心になっているでしょう。僕が言っているのではない、宗祖がこう言っているのです。

質問(岡田さん)・・・しかしそのことは非常に重要なことなのですね。

延塚先生・・・それはそうです。

質問(岡田さん)・・・今。お話になったようなことですね。

延塚先生・・・そうです。

質問(岡田さん)・・・聞かせていただいて、とてもありがたかったです。

延塚先生・・・あ、そう（笑）、今日は体調いいな岡田先生。ややこしいぞ今日は。

さあ、それではいいかね。（信の巻の）別序（東聖典210頁、西聖典註釈版209、島地聖典12-54）を皆さんと読んでいこうかね。ここからは、今度は機の問題だから、宗祖が頂いた感動をそのまま述べておられる。こう考えられます。読んでみましょう。

それ以（おもん）みれば、信樂（しんぎょう）を獲得（ぎやくとく）することは、如来選択の願心より発起す、真心（しんしん）を開闡（かいせん）することは、大聖矜哀（こうあい）の善巧（ぜんぎょう）より顕彰（けんしょう）せり。

しかるに末代の道俗・近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶（へん）す、定散（じょうさん）の自心に迷（まど）いて金剛の真信に昏（くら）し。ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閱（ひえつ）す。広く三経の光沢（こうたく）を蒙（かぶ）りて、特（こと）に一心の華文（かもん）を開く。しばらく疑問を至してついに明証を出だす。誠に仏恩の深重なるを念じて、人倫の瞬言（ろうげん）を恥じず。浄邦を欣（ねが）う徒衆、穢域（えいき）を厭（いと）う庶類、取捨を加うといえども、毀謗（きぼう）を生ずることなかれ、と。

ここまでが別序です。そしてその後に標挙（ひょうこ）、信の巻は第十八の「至心信樂の願」、これを標挙にしますよ。そしてそこで問題にするのは「正定聚の機」。さっき言ったように大きな一乗海に目を開いて、必ず仏になる。そういう自信を頂いた「正定聚の機」。それを明らかにしていくのが信の巻ですよと、こういうふうになっていると思います。そんなに難しいことはないでしょう。

普通、信心と言うと、「何かを信じますよ」と考えてしまう。そうすると浄土教も「阿弥陀如来を信じますよ」と、こういうふうを考えてしまいます。そうするとそれは、いやいや、そうなるかとキリストを信じますよと言う人もおれば、もうちょっとと言うと、大切な旦那さんを信じていますよとか、奥さんを信じていますよというような形に信心というのは考えられてしまうのです。

親鸞聖人がおっしゃっている信心というのは、そういう人間の生活の中の精神作用ではありませんよ。私たちの生活で信じると言った時には、必ず信じないということと裏表。だから、私は学生にいつも言っていました。彼女が「あなたのことを信じていますよ」と言ったら「危ない

ぞ」と。信じてないからそう言っているのですね、いつでもそんなふうには、ころころころころと変わる。それを信心と普通は考える。ところが真宗の信心はそういうものではなくて、「本願が信心になってくださった」。

「如来選択の願心より発起す」。

これは、ここだけではありません。例えば皆さんよくご存じの和讃だと、東聖典496（西聖典註釈版592、島地聖典11-29）ページを開けてみましょう。これは『高僧和讃』の善導大師のところですが、496ページの一番下のところ21と言う和讃、いいですか。

「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり 自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわず」

「信は願より生ずる」。こういう言葉が出てきますね。この中で真宗に頭を下げた人がいるでしょう。自力ではどうにも救われないと。南無阿弥陀仏と頭を下げて初めて、今度は自分の、ここは私の言い方だから、頭で考えていることが、どうにもならなくなって、初めて命の方からの声が聞こえてくる。「いつまで自我を立てて、いいとか悪いとか、勝ったとか負けたとか言って苦しんでいるのか」。「命そのものの世界に帰って来い」。「わが名を称えて、我が国に帰れ」と。命はどんな命も平等。どんな命も比べることがない。そういう命の世界こそ、あなたの根源的な世界なのだというふうに、はじめて「本願」と、本願の呼び声というのは、少し勉強した人は「本願招喚の勅命」。これが私たちの体全体を貫いた。その時に初めて、阿弥陀を信じるのだということが起こるのだから、信心は自力無効ということを通して起こってくる。格別の能力、格別の努力、そういうことを何の必要もしない。本願の方から信心を頂いたとしか言いようがないから、真宗の信心は「願より生ずる」と。願というのは、これは如来の願だから、だから信心さえ起これば、如来の世界。さっき言った「一乗海」と言ってもいい、あるいは「功德大宝海」と言ってもいい、あるいは「浄土」と言ってもいい。そういう仏様の世界が信心には開かれて、ほっといても自然（じねん）に成仏する。仏に成る。本願力に依って必ず仏になっていくのだと。こういうことをここで言葉通り言えば、そういうことを言っていますね。

「それ以みれば、信樂を獲得することは」、この獲得というのが難しいのです。「信樂を獲得することは、如来選択の願心より発起す」。信心は本願だ。要するに信心と言っても人間の精神作用ではなくて、信心は本願だと。信心と言うのは衆生です。本願と言うのは如来です。だから、本来、信心と如来の本願とはどう考えてもひとつではない。ところがそれがひとつなのだ。と言うところに『大経』が持っている秘密があります。『大経』が説かれた理由があります。この辺を説明するのは難しい。けど、親鸞さんが言った通りに言うとなんかそういうことですね。分かりますね。

あのう、あれでしょう。例えば東聖典729ページ（西聖典註釈版1050、島地聖典30-5）に、これは『歎異抄』で言えば、信心同一の問答ね。「如来よりたまわりたる信心」（後序、東聖典639頁）という言葉で言われますね。それが「信は願より生ずる」と言うことなのですが、ここで皆さんご存知のように、善信が「私の信心も法然の信心も一緒だ」と言うと、聖信房、勢観房、念仏房などが「そんな馬鹿なことがあるか」と言って議論になる。ご存知ですね。いつも『歎異抄』を読んでいると思いますが。今日は『御伝鈔』（東聖典p729）の方を読んでみましょう。

聖人 親鸞 のたまわく、いにしえ我が本師聖人の御前に、聖信房、勢観房、念仏房已下（いげ）の人々おおかりし時、はかりなき諍論をし侍（はんべ）る事ありき。そのゆえは「聖人 源空の御信心と、善信が信心といささかもかわるところあるべからず、ただ一（ひとつ）なり」と申し

たりしに、このひとびととがめていわく、「善信房の、聖人の御信心とわが信心とひとしと申さるる事いわれなし。いかでかひとしかるべき」と。等しいという理由は何やと。善信申して云わく、「などかひとしと」、ここから大事ですよ。「などかひとしと申さざるべきや」。どうして等しいと言うことができるかと言えば、「そのゆえは」、その理由は、「深智博覧にひとしからんとも申さばこそ、まことにおおけなくもあらめ」、分かりますね。法然上人の深い智慧、それから学識が等しいと言うのであれば、まことに恐れ多いことである。

「往生の信心にいたりては」、ここから大事です。学識や智慧は浅いかもしれない。しかし往生の信心にいたりてはひとつなのだと。なぜかと言うと、「一たび他力信心のことわりをうけ給わりしよりこのかた、まったくわたくしなし」。ここ大事。「一たび他力信心のことわりをうけ給わりしよりこのかた」、「一心帰命」と、こういう信心が起こった時には、まったくわたくしなし。自力無効だ。「しかれば、聖人の御信心も、他力よりたまわらせたまう、善信が信心も他力なり。かるがゆえにひとしくしてかわるところなし」。見事でしょう。これが親鸞の答えです。『歎異抄』の方は「如来よりたまわりたる信心」と言ったのは法然が言ったことになっている。ところが『御伝鈔』は、「しかれば、聖人の御信心も、他力よりたまわらせたまう、善信が信心も他力なり」と親鸞が言ったことになっている。こちらの方が正しいと思います。

なぜかと言うと、法然は他力回向という言葉を使わなかった。『観経』に立っているから。回向という言葉はありません。だから法然は「如来よりたまわりたる」とか「他力回向」という言葉は一切使っていない。法然が書いたものがあるでしょう、『法然全集』。あれをよく読めば分かります。一か所だけ出てきます。「法蔵菩薩の他力回向」という言葉が一か所出てくるけど、それは後で書き換えたものだと言われています。だから法然は『観経』だから、回向という言葉を使わなかった。このように「他力よりたまわらせたまう」、これは完全に回向ですから、それを親鸞の方が言ったのだというのは、『御伝鈔』の方が正しいと思います。だから親鸞が偉いと言っているのではありません。

法然は何と言ったか。それは、よく勉強すれば分かります。せつかく言いかけたから言いましょね。親鸞が晩年に一番大切な回向論をお書きになるのは『如来二種回向文』、それから『三経往生文類』、それから『文類聚鈔』（『浄土文類聚鈔』）。これは親鸞が八十三歳、八十四歳、八十五歳の頃に書いた。今申し上げた『三経往生文類』と、それから『如来二種回向文』と、『文類聚鈔』の回向の考え方は全部一緒です。『教行信証』と少し違います。すみませんね。けど大事なところですよ。申し訳ない、あまり勉強し過ぎて。いいですか、『教行信証』は「往相の回向について、真実の教行信証あり」（教巻）と出てきます。ところが今申し上げた晩年の回向論になると、回向は「教」を外します。往相の回向は「行・信」から始まる。教がぬけています。なぜかわかりますか。こちらの方が実践的だからです。如来の回向の始まるのは、南無阿弥陀仏と頭が下がった時に向こうから回向を頂くのです。教は、これは先生が教えてくださる教えですから、だから実際から言うと、南無阿弥陀仏と頭が下がって念仏申さんと思ひ立つ心・行信、そこに始めて如来の回向をいただく。だから「至心に回向したまえり」と、こういうふうに打つわけです。そうすると、実践的に言うと、行から始まる方が実践的なのです。晩年の回向論は全部そうなっています。

ところが『教行信証』は、教・行・信・証、全部如来の回向のはたらきである。こういうふうになっているわけです。なぜかと言うと、これは、『法華経』を中心とする聖道門の人たちに『大

経』の仏教は回向の仏教なのだと、自力ではないのだと言うことを最初から宣言して、違いを明確にしなければならなかったために、『大経』の教え、『観経』の教え、『阿弥陀経』の教えは、これは如来の回向なのだというふうに、初めから教えを回向の方に入れて、明らかにしていくのは、今申しましたように聖道門の人たちと際立って違うということを明確しなければならない課題があったために、『教行信証』の方はこうなっている。

ところが、晩年、実践的に言うと、回向は、南無阿弥陀仏と頭が下がった時に初めて如来の回向に触れるのだから、だから回向は行信から始まる。こういうふうになっている。『文類聚鈔』は八十五歳のときに書いたという記述がありますが、従来、いやこれは若い時に書いたのだという意見もあります。そうではありません。絶対に八十五歳のときに書いたのです。なぜか。思想的に見ると、晩年の回向論と全部共通だからです。若い時にああいうことは、宗祖は言ってないからです。そんなふうに思います。

それで私が言いたかったのは、法然は如来回向という言葉を使いませんでした。だから、きっと親鸞聖人は法然上人に、「回向ということが大事だと思います」と言ったと思います。それが真宗という仏教の核心だから。信心まで回向なのだからね。だから「回向ということが核心だと思いますが、法然上人いかがでしょうか」ときくと聞いたと思う。そしたら、法然も「そうですよ」と。「そうそう、あなたの言う通りね」と答えています。「あなたの言う通り」。ただ『観経』では「回向」という言葉が出てこないからね。だから私は「義なきを義とす」と言ったでしょう。念仏は義なきを義とす。自分の力で理解するというではない。「そうではない」ということを言ったでしょうと、いうふうに法然が答えておられます。なぜかと言うと、晩年の回向論の往相回向も還相回向もいきなり、今言う「義なきを義とす」ということが出てくるからです。

これは、昔から私は、なんでこんなところに「義なきを義とす」と出てくるのだろうと思って、ずっと悩んでいたところですが、例えば、『如来二種回向文』を見てみましょうか、これが大事なのです。東聖典477ページ、ここに往相回向と還相回向が明確に規定されていきます。先ほど私が言ったように、476ページ（西聖典註釈版721、島地聖典18-1）の最初から四行目から読みましょうか、

「この本願力の回向をもって、如来の回向に二種あり。一には往相の回向、二には還相の回向なり」。これでいいですね ところがその次、

「往相の回向につきて、真実の行業あり、真実の信心あり、真実の証果あり。」

というふうに、行、信、証が出てきて教がない。ないね。『教行信証』だと、教行信証ありになっていますね。ところがないでしょう。行、信、証になっているでしょう。それは今言ったように行・信というところに初めて如来の回向を頂くから、実に実践的なわけですね。そして往相回向はこういうことです、如来の往相回向、如来の還相回向と出てきて、477ページのところ、終わりから四行目、

「これは如来の還相回向の御ちかいなり」。ここまで述べて来たことね。その後、「これは他力の還相の回向なれば、自利・利他ともに行者の願樂にあらず」。還相回向というのは私たちの願樂ではないのです。「法蔵菩薩の誓願なり。「他力には義なきをもって義とす」と、大師聖人はおおせごとありき」と書いてあるでしょう。法然は回向について「他力には義なきをもって義とす」と言ったのだと書いてあるでしょう。だから、僕は勝手なことを言ってはいません。親鸞聖人はきっと、「回向ということが大事なのだ」と。この「回向ということが真宗を成り立たせる基本概

念だから、だから『大経』に依って回向というふうに言わないといけないと思います」ときつと言ったのです。そうしたら、法然上人は「そうそう、その通り。あなたがはっきりさせてください。私は『観経』に依っていたから、「他力には義なきを義とす」と言ったでしょう。それが回向ということです」と。こう答えたと書いてある。「大師聖人はおおせごとありき」と書いてある。ここだけではないのです。まだ出てくるのです。他のところにも往相回向・還相回向、今のところは還相回向のところに出てきていました。他のところには往相回向のところにも出てきます。「大師聖人は回向について、義なきを義とすとおおせそうらいき」、おっしゃったのだと。

だから法然は『大経』に立っていないために、くどいようですが、回向という言葉を使わなかったけども、それと同じことを言うために、「義なきを義とす」と教えてくださったのですよと親鸞聖人がおっしゃって、僕が言っているのじゃないよ。親鸞聖人がそうおっしゃっているからと、知っておいてください。となると、さっき言った信心同一の問答で、『歎異抄』では法然上人が「如来よりたまわりたる信心」と言ったことになっている。あれは聞き書きだから。そうではなくて、この『御伝鈔』の方は「如来よりたまわりたる信心だ」と親鸞の方が言っている。きっと『御伝鈔』の方が正しいのだと、いうふうに思います。ちょっと休憩しましょうか。

質問(岡田さん)…先生、あの一つだけ、「他力には義なきをもって義とす」と、大師聖人はおおせごとありき」と言うのは、確かに法然上人が仰せになったことは間違いないと思いますが、それは還相回向について、それに対応して、これを言ったのだというふうに確証はございますか。

延塚先生…はい。還相回向のところを書いてるからです。さっき言ったように、もうひとつの所は往相回向のところにも書いてます。要するに回向のところ「義なきを義とす」と書いている。だから往相回向も還相回向もどちらも法然は「義なきを義とす」と言ったのだと、そういうふうに読まないで読めませんから、ということです。ちょっと休憩しましょう。(休憩)

講義 2

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

先ほどから問題になっているのは「信は願より生ずる」、つまり宗祖の『教行信証』の正確な言葉で言えば「他力回向の信心」である。そこから展開して岡田先生がいろいろおっしゃってくださっていたわけです。それでせっかくだから、いまちょっとさがしました。『三経往生文類』。先ほどは『如来二種回向文』の477ページの終わりから四行目ところ、

「これは如来の還相回向の御ちかいなり。これは他力の還相の回向なれば、自利・利他ともに行者の願樂にあらず。法蔵菩薩の誓願なり。」とあって、最後に、

「他力には義なきをもって義とす」と、大師聖人はおおせごとありき。よくよくこの選択悲願をこころえたまうべし。」とありますね。いきなりこれ、なんで「他力には義なきをもって義とす」と、こんなところに出てくるのか、これを僕は何のことやろうと思って、ずいぶん疑問だっ

たわけですが、実はこれは還相回向ですが、『三経往生文類』の方を見ますと、東聖典470ページ（西聖典註釈版629、島地聖典16-3）、ここまではずっと往相回向について説かれてくるのです。そして470ページの終わりから四行目往相回向の最後です。ここに、

「この阿弥陀如来の往相回向の選択本願を、みたてまつるなり」ここまで往相回向、阿弥陀如来の選択本願を見てまいりました。「これを難思議往生ともうす。」この本願に依って私たちは難思議往生と言う仏道にたたしてもらふことができるのです

「これをこころえて」このすべてよく心得て、「他力には義なきを義とすとしるべし。」

とここにも出てきます。さっきは還相回向でしたが、ここは往相回向になります。と言うことは往相回向も還相回向も法然は「他力には、義なきを義とす」と私は言ってきたでしょうと、こういうふうに答えていたことになります。そうですね。そうしてせっかくですから、『浄土文類聚鈔』についてちょっと先ほど申し上げましたが、『浄土文類聚鈔』の東聖典402～403ページ（西聖典註釈版478、島地聖典13-2）をあけて見てください。

まず『浄土文類聚鈔』は短い序文があって、そして教、行、信、証とはじまっています。しかるに「教」と言うは『大無量寿経』なり。この体は「うんぬん」とあって教が始まります。次に「行」と言うは、すなわち利他円満の不行なり「云々」と出てきます。そして大切なのは「諸仏咨嗟の願」より出でたり、また「諸仏称揚の願」と名づく、また「往相正業の願」と名づくべきなり。」

この「往相正業の願」と言うのは、親鸞の名付け願名です。だからここは親鸞が名付けた願名、ここは親鸞が名付けた「往相正業の願」の願です。これは印をつけておいてください。今は時間がないので、次のページを開けてください。行が終わって今度は「信」ですが、405ページ（西聖典註釈版480、島地聖典13-4）、「浄信と言うは」で始まります。これには実は意味がありまして、信をたてないで行の中に納めているのです信を、だから「信」と言うのではなく「浄信」という言葉で「信」を表すのです。そこはともかくとして、そのまた2行後に「念仏往生の願」これは法然が言った第十八願です、また「至心信楽の願」これはね明恵が言った願です。また「往相信心の願」これは親鸞が名付けた願名です。そして「行」は「往相正行の業」、信は「往相信心の願」親鸞が付けた願名は全部「往相」です。そして行信でしょう、教は外しています。

「証」を見て見ましょう。東聖典406ページ（西聖典註釈版481、島地聖典13-5）「証」と言うは、すなわち利他円満の妙果なり。すなわち「必至滅度の願」より出でたり。また「証大涅槃の願」と名づく。また「往相証果の願」と名づくべし

「往相証果の願」これは親鸞が名付けた願名なのです。そうすると『浄土文類聚鈔』の中で親鸞が願名をつけた願は全部「往相正行」「往相の信」「往相の証」と言うように、行、信、証はすべて往相回向である。こういうふうに親鸞が願名を付けていますから、『三経往生文類』も教を外して行・信・証が往相回向の内容になっている。と言うことになります。そういう意味で『三経往生文類』それから『如来二種廻向文』それから『文類聚鈔』、これは回向の考え方が共通している。この『文類聚鈔』は一番最後にあるように東聖典422ページ（西聖典註釈版、島地聖典には記載なし）にあるように、親鸞聖人が83歳の時に書いたと書かれていますから、これは正しいと思います。

私たちが読んでいる『三経往生文類』は 略本・簡略に書いたものは83歳の時に書きました。そしてさっき言った『如来二種廻向文』は、これは84歳の時の著作です。その『如来二種

廻向文』の往相回向と還相回向とは合わせて『三経往生文類』の校本を85歳の時に書いています。ですから83歳、84歳、85歳の時に晩年の親鸞聖人の回向の考え方の中心なるのは『如来二種廻向文』、84歳の時の著作、これが一番大事なるというふうに思ってください。そういう意味で晩年の回向論は共通しますから『文類聚鈔』もここに書いてあるように親鸞の晩年の著作だということが分かると思います。

状況判断はなんとでもいえます。『文類聚鈔』がなぜ若い時の著作かと言うと皆さん「文類偈」と言うのを知っていますか。「正信偈」といっしょに「文類偈」を歌うでしょう。あの時に帰命無量寿如来とはじまるでしょう。「文類偈」は「西方不可思議尊」から始まる。西方不可思議尊と言うのは何と言っても法然の言葉だから、だから若い時に法然の「西方不可思議尊」と言う言葉を使って『文類聚鈔』を書いたのだという人もおります。ところがそうではなくて、これね皆さん、83歳 84歳 85歳と言うと何を思いますか。「善鸞事件」です。

善鸞事件で善鸞が第十八願を「しぼめる花」に例えた。つまり第十八願は「あれはうそだ」と「私は、夜、秘かに親鸞聖人から聞いた」と、こう言ってみんなを惑わした。ところがこの83歳の時には、もう『教行信証』は公になっていました。76歳で尊蓮と言う弟子に書写をさせていますから、少なくとも76歳以降は、『教行信証』はみんな読んでいたと思います。そうですね。ところが皆さんご存知のように『教行信証』はひたすら『大経』にたった仏道観が述べられているのです。『観経』と『阿弥陀経』についての解説をしたところはひとつもない。だから『教行信証』を読んだ弟子たちも善鸞の言葉に惑わされたということは、『教行信証』では、やはり足りないところがあったのではないかと親鸞は反省した。それは当然ですね。社会的には息子を義絶するという形で一応決着はついた。

義絶と言うのは今のような勘当とは違って、義絶と言うのはきついです。全部の門弟に義絶状を渡します。関東の正信房、河田の唯円房、たくさんお弟子さんがおりますね。このお弟子さんたち、みんなに義絶状を渡すから、義絶状はたくさん残っています。なぜかと言ったら善鸞が訪ねてきても一宿一飯の世話をしてはいけない。義絶したのですから、と言うことを明確にするためにお弟子さんたちに義絶状を出しているのです。ですから義絶すると言うのは今のような勘当するのとはちょっと違うのです。結局善鸞は。言葉は悪いけれども善鸞は何か新興宗教のように群れでうろうろして野垂れ死んだと書かれている。そんなふうに弟子さんたちも一切かまうなと言うことを言うために義絶状をたくさん出すわけです。社会的には一応そう言うことで親鸞は一応善鸞の罪を償ったということは言えますが、思想的に何故あんな風に迷ったのか、しかも『教行信証』は公になって、有名な弟子たちはみな読んでいます。にもかかわらず、第十八願の往生がだめなのだとすることに惑わされたということはどう考えたらいいのか、『教行信証』には、『大経』はこうです、『観経』はこうです。『阿弥陀経』ではこうですという解説をひとつもしていない。だからだろうということで『三経往生文類』を書きました。『大経』往生と言うは如来選択の本願、不可思議の願海に依っておこる。本願力に依る往生である。『観経』は自力に依る往生だから、結局は最後には向こうから来迎に来るとしか言いようがないよ。『阿弥陀経』も自力に依る往生だから、死んで往生するとしか言えないよ。『大経』往生と『観経』往生と『阿弥陀経』往生はこのように違うのですと書いたのが『三経往生文類』です。

これは『教行信証』で明確に説明していなかったその責任をとろうとした。と考えられます。それとさきほど「西方不可思議尊」、法然、『教行信証』を書いて法然の思想的責任をとったわけ

です。ところが誰が読んでも、皆さんがこれから読んでいくのは信の巻でしょう。そして「別序」がついているでしょう。そして『教行信証』の中で一番大事なところは信の巻だということが分かる。そうすると単純な話ですが、法然は「念仏ひとつでいい」と言ったのに、親鸞の『教行信証』を読むと「信心信心」と書いているではないか。「これはおかしいではないか」と言う疑問が門弟から起こってきた。

これは当然でしょう。皆さんもそう思うでしょう。だから手紙を読んだらすぐにわかる。行信不離だと、行と信を別だと考えるから、「法然は行で、私が信心だ」ということを言う人がおるけれども、そうではなくて、行信と言うのはこれは紙の裏表だから、私は法然の念仏について信心の裏打ちしたのであって、法然が言ったことと違うことを言っているのではないのだということを晩年にどうしても言わなくてはならなかった。だから晩年の著作は全部法然へ回帰していきま。法然に帰って行きます。だから『文類聚鈔』も『教行信証』のダイジェスト版ですけれども「西方不可思議尊」、念仏ひとつでいいのです、と言うところに帰って行くのです。

そんなふうに『教行信証』を公にした親鸞は。その後今言った、これは長生きした業ですね、善鸞事件みたいなことが起こったから、息子を義絶すると言うのはたまったものではありません。だから寝られなかったのです。けど、よく考えると、それは結局、お互いに信心が明確になっていなかったからだ、問題はそこにある。そうするとそれについてどうしてもはっきりしておかなければならないことがあると言って書いたのが83歳以降の親鸞の著作になります。83歳と言ったらもう書けないです。ぼくはもう75歳になったのです。あと5年必死で書こうと思うけれども、目は悪くなるし、なかなか書けません。

宗祖は83歳から書いたのです。あれは人間的に言えば、やはり息子を義絶して、こういうことになった。その重い責任の中で親鸞は泣きながら書いたのだと思います。だからすごい執念だと思いますが、晩年は、今言ったように、晩年の著作は善鸞事件との関連の中で書いたと言うのがひとつ、もうひとつは『教行信証』を公にしたのにかかわらず、行と信が、法然は念仏、親鸞は信心と言う、これはおかしいではないかという疑問がある。だから、手紙を読んでご覧、全部「行信不離・行信不離」ということをしつこく言っています。だから、私は法然上人が「念仏ひとつ」と言ったことと違うことを言っているのではないのです。と言うことをしつこく言っています。そう言うことを晩年に法然に対峙しています。回向と言ったけれども、実は、法然は「義なきを義とす」と言って下さっているのです。法然の「念仏ひとつでいいのだ」と言う、こういう趣旨が裏に隠れている、と言うふうに思われます。

いいですかね、そんなふうに如来の回向ということが『大経』の核心になります。そして信の巻の核心になります。だから信心と言っても、私たちの普通の「信じるよ」と言うのとは違って、むしろ本願が、いのちの願いが自分のところを貫いた。だからこれを信心と言うのだと、そしていのちの世界はそこに開かれてきている。青い色は青い光を出し、赤は赤、白は白、青が赤を羨（うらや）んだり白が青を蔑（さげす）んだりすることがない、比べる必要がない平等の世界、その一乗海を信心は開いているのです。信心は願です、如来の願です。だから如来の世界はすぐそこに開かれるのだ、「至心に回向したまえり」。

松原先生はいつもそこで手を叩いていたというでしょう。「至心に」（手を叩く）「回向したまえりだ」と。寝ようとしていたけれども、そこでいつも目が醒めていました。今、皆さん寝ようとしたから手を叩いた。そして、必ず「至心に回向したまえり」この手は何だと思ったけれども、

新しい主体は、本願が信心になって「信に回向したまえり」信心として本願が発起したのです。

だから「彼の国に生まれよと願えば浄土は即開かれる」即得往生住不退転と言うことがそこに実現するのだということをしょっちゅう言っていました。「至心に回向したまえり」分かりますね。その至心回向と二十願の自力の至心回向、あの二つが『大経』の中であの2回しか出てこない。それも知っておいてください。だからあれは大事なのです、今日はテーマではないから言いませんが、とにかく別序に帰りましょう。

ひとつは、今申し上げましたように「それ以みれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より発起す、」願心こそ信心になってくださった。法蔵菩薩の本願が私の信心にまでなってくれたのだとこう言ってもいい。

もうひとつは「真心を開闡(せん)することは、」真実の信心を開き、明らかにすることは「大聖矜哀(こうあい)の善巧より顕彰せり。」大聖釈尊が我々を憐れんで、人間の生き方を憐れんで、何とかしてもとの一如の世界に、私たちを目ざましめたいと、目覚めさせたいと、そういう善巧・方便の教え、手立てに依って、私たちの信心は発起するのです。ですから皆さんの知っている言葉で言えば「釈尊の発遣と弥陀の招喚」これに依って私たちの信心を頂くことができます。こういうことになります。これを明らかにしてくださったのは善導大師ですから、善導大師のさっきの東聖典496ページ(西聖典註釈版592、島地聖典11-29)を開けてみてください。同じ善導大師の和讃の中で、先ほどは「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり 自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわず」これをさっき注目しました。そのページの一番上13と言うところに「釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し われらが無上の信心を 発起せしめたまひけえり」とありますね。お釈迦様と阿弥陀様の大きな慈悲、これは父と母のようである。お父さんとお母さんが子供を育てるときに、苦勞して「ああでもない、こうでもない」と教えてくださったように、お釈迦様と阿弥陀様は自分の持てる力をすべて尽くして、私たちに無上の信心を起こさせたいと、そう思ってくれたのである。これでいいですね、そこまでは一応そう言うことです。

その次、今日は最初ですから、その次に、「しかるに末代の道俗」にもかかわらず。末法の世を生きる「道」は僧侶たち、「俗」は俗人たち、にもかかわらず、末法の世を生きる僧侶や俗人たち、あるいは、「近世(ごんせ)の宗師」、今、各宗の宗派の開祖言われている人たちは、「自性唯心に沈みて浄土の真証を貶(へん)す」、おとしめる。「定散の自心に迷いて金剛の真信に昏(くら)し。」きついですね、末法を生きる僧侶たち、俗人たち、さらに近頃の各宗の宗派の開祖たちは自性唯心に沈んで、自性唯心というのとは分かりますか。自性唯心と言うのは自分の本性は仏性だと言うのが聖道門の主張です。私たちはみんな仏性を頂いて生まれてきているのです。ところが煩惱に依って仏性がけがれて、見えなくなっているから、だから煩惱を一つひとつ取って行って、本来の仏性を輝かせる。それが聖道門の修行です。ですから聖道門の主張は自分の本性は弥陀である。仏性である。

そして浄土と言っても心の中にあるのであって、どこか他の世界にあるのではない。心の中の浄土、己心の弥陀 唯心の浄土、ともいわれます。ですから私たち凡夫は、煩惱にまみれて生きているから、いつまでたっても仏性が分からないのだと、修行をして自分の本性が仏性であるということが分かるまで修行をなささい、と言うのが聖道門です。ですから、これはどちらも聖道門の主張です。

もうちょっと言いましょう。聖道門の観念的な主張です。頭で考えるとよく分かる。本来仏性がある、それが煩惱で隠れているのだから、煩惱を一つひとつ取っていけばいい、浄土と言っても仏さんの世界なのだから、それは煩惱を一つひとつとっていったところに、浄土が開かれるのだから、だから浄土と言っても自分の心の中の確証である。こういう意味ですね。

これは東聖典692ページ（西聖典註釈版941、島地聖典26-14）を開けてください。後ろか7行目から読みましょうか。この前は、龍樹菩薩が十住毘婆沙論の中で難行道と易行道をはっきりわけたということが説かれています。ですから、難行道と易行道とは全く異質なのだということを受けて、

「曾祖師黒谷の先徳」、法然上人のことです、法然上人は龍樹の難行道易行道、「これをうけて、「難行道というは聖道門なり」、聖道門と言ったのはこれ道綽です。法然上人は龍樹の難行道易行道を受けて難行道というのは、道綽が言った聖道門のことである。「易行道というは」道綽が言った浄土門のことである。とおっしゃった。「のたまえり」、「浄土門なり」（選択集）とのたまえり。とおっしゃった。「これすなわち、聖道・浄土の二門を混乱せずして、浄土の一門を立てんがためなり」。分かりますね。聖道を捨てて浄土の一門に立つ、だから聖道と浄土を混乱はしていないのです。「しかるに」、にもかかわらず、「聖道門の中に大乘小乗・権実の不同ありといえども、大乘所談の極理とおぼしきには「己身の弥陀」・「唯心の浄土」と談ずるか。」これ分かりますね、聖道門と浄土門は決定的に異質なのです。その違いをはっきりしなくてははいけない。こういうふうに法然はおっしゃっている。

そしてそれは聖道をすてて浄土に立つためである。にもかかわらず、聖道門の中に大乘小乗とある。あるいは「権実」というのは、聖道門の中にも真実と言うものあれば方便と言うものもあって不同である。しかし大乘仏教を総じて言えば、大乘所談の極理とおぼしきには、大乘仏教の究極的な道理というものは「己身の弥陀」・「唯心の浄土」と談ずるか、ということである。大乘仏教は最終的には、「己身の弥陀」・「唯心の浄土」と言うところに帰着する。

「この所談においては、聖のためにして凡のためにあらず。」こういう見解は聖道門のためであって、凡夫のためではない。「かるがゆえに、浄土の教門はもっぱら凡夫引入のためなるがゆえに、己身の観法もおよぼず、唯心の自説もかなわず、ただとなりのたからをかぞうるににたり。」分かりますね。要するにこう言う観念的な言い方は自分の身をしっかり見て阿弥陀だということが分かるまで観法するとか、あるいは浄土は自分の心だということが分かるまで修行する人のためにある、と言う言い方であって、こう言うのは隣の宝を数えるみたい。凡夫には何の関係もない。凡夫はただ南無阿弥陀仏と念仏をして、自力無効と言うことを通して。分かりますね、初めて浄土という世界に触れるのであって、これは称名念仏であって、聖道門の言う観法ではないのだと。そこをはっきりしてください。というふうに、これは覚如上人がお書きになったものに書かれています。

頭のいい人は、僕は頭が悪いから、頭のいい人は聖道門の言い方は実によく分かるのです。皆さんの一番深いところに仏性があるよ。それが煩惱にまみれて見えなくなっているから、煩惱を一つひとつなくして言って「断惑証理」と言う。仏教の修行をやりなさい、そして煩惱を超克して行って、やがて仏性を開覚しなさいと、よく分かるでしょう。「ああなるほど」と、法然もやったのです。親鸞もやったのです。やっても観法自体が自力だから、いくらやっても嘘を重ねて本当にしようというので、いくらやってもできなかった。私たちはできないとどうなるかと言う

と、結果ばかり考えるから、できないのは努力が足りないだからとしか思えない。だから親鸞は努力が足りないからだと思うから、また努力する。やってみても努力してみてもできない、結果ばかり考えていると、いつまでたってできないから、結局、努力が足りないとしか思わない。

ところが法然に遇って「ただ念仏して弥陀に助けられ参らせて」と言った時に、今まで結果ばかりを考えていた頭が反対向きになって、要するに出発点が間違っているではないか、とすることを教えられた。そうすると出発点が間違っているのだから、聖道門の修行なんて成り立つ訳がない。そうですね、だから「いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（東聖典 p627、西聖典註釈版 833、島地聖典 23-2）人間がどれだけ努力しても出発点がまちがっているのだから地獄に決まっているとはっきり目覚めました。そこに阿弥陀の智慧が私を教えてくださいました。そしていのちからさっき言ったように、「わが名を称えて我が国に帰れ」と、こういう浄土からの呼び声が今届いたと。そこに始めて凡夫のままで、浄土に生まれていきたいとこう思うのであって、「己身の弥陀」・「唯心の浄土」なんて言うことは、よく似たことを言っている。似たことと言うか、そのままを言っている。

例えば、親鸞は同じことを言うのです。「信心は衆生に起こる。本願は如来のものである。」とところが信心と本願は同じものだということは、「信心は如来である」と言っているのです。そうするとこれと（信心は衆生に起こる。本願は如来のものである）同じことを言っていることとなる。心の中に浄土があり、信心こそ弥陀というのは、自分の本質が弥陀なのだということほとんど同じことを言っているわけです。だから、これ（信心は衆生に起こる。本願は如来のものである）表面だけ見たら、言葉すらだけをみると親鸞も同じことを言っているではないか、「衆生の信心が如来だ」と衆生が如来だという話だから、どう違うのかと言うことが実は信の巻の課題になります。もう時間が来てますね。

今日は、僕は難しいことを言い過ぎるか。あの、「弥陀の招喚と釈迦の発遣」。これはよく聞きなれた言葉だから、みな知っていますね。それは具体的にどういうことか、どう答えますか。「いただく」、いただくと言うのはどういうことですか。なかなか難しいでしょう。親鸞が言った通りに言います。私たちが初めて阿弥陀に帰命するという時にはまずは、みんな自力無効ということが大事だということをいま迄言ってきました。そうすると体験的に言うと、自力で今まで救われようと思って頑張ってきたけれども、なんの役にもたたなかった。すいませんでしたと頭を下げることです。それを本願は至心と説いています。まず、第一に阿弥陀が真実になって、私たちが真実でないということを知らせる。それが至心と言う仕事、阿弥陀の方の仕事、この世で真実に遇ったことが一回もないでしょう、僕らは。

ところが仏さんに遇った時だけは、「ああ、自力では救われませんでした。ごめんなさい。今まで威張って偉いことを言ってきてごめんなさい。」とこうなるね。それは如来が真実になって衆生に不実を知らせる。言っていることわかりますか。少しでも仏教に触れた、少しでも仏教の体験を持ったと言う人であつたら分かるでしょう。「ああ、今まで偉そうにしてきて全部自分のためにと、自分が頑張ってきたから、世の中うまいこと成って来たと思っていたが、よく考えてみたら全部人に支えられていた。今まで偉そうに言って来たことが全部人を傷つけていた、ごめんなさい」という懺悔から始まる。

それは如来が鏡になって真実という鏡になってあなたの相をよく照らしました。それを第十八願では至心という言葉で表している。その次に今度はどこを探しても人間の中に信心なんて

ありえない、真実なんてありえない。全部雑毒雑修の自力の行は浄土に生まれようとしても不可であると書いてあります、善導大師は。

だから法蔵菩薩が信楽になって、私たちに「至心に回向する」と言って、法蔵菩薩が今度は信楽と言う形をとって、私の信心にまでなってくれました。その法蔵菩薩の真実の信楽の心で我が国に生まれんと欲えと「欲生」、と誓って下さっている。弥陀の招喚の具体的なはたらきは至心・信楽・欲生にある。弥陀の招喚と言う、よく分かる言葉で言えば弥陀の招喚で、それをもう少し『大経』の本願にきちっと返して言えば、実は如来の方が五劫の間思惟して真実になって、あなたたちが不実であるということを示し出しましょう、これが至心。そして真実の心がひとつもない者に、私が信心になりましょう。これが二番目。そしてその心で我が国に生まれんと欲えというのだから、欲生のところでは、浄土のはたらきがすぐ開かれる。即得往生と言うことが実現します。これが『大経』の如来の善巧摂化、これはだから信の巻では三一問答として、やがて親鸞聖人が明らかにして来るところ。ですから、弥陀の招喚と言っても、単に呼び声に呼ばれているという、ある意味で言えば文学的な情緒的な表現ではなくて、きちっと本願の道理に即して証明していく、これが三一問答になります。これが弥陀の大悲を表す。

もうひとつは釈尊の大悲、釈尊の発遣。これは『大経』、『観経』、『阿弥陀経』を説いてくださったこと、弥陀の方は、念仏者は片一方の足は弥陀の覺りにつけておかないといけない。片一方の足はこの娑婆につけて娑婆を生きなくてはいけない。弥陀の覺りだけになると、飛んでる。神がかり。娑婆だけになると娑婆真ただ中で仏法がない。真の仏弟子は、こっちは真実の覺りに足をつけ、こっちは娑婆に足をつけておかないといけない。真実の覺りの方は信の巻の三一問答、こっちは娑婆の方は化身土の巻だから、娑婆です。そこに『大経』、『観経』、『阿弥陀経』の三経一異の問答が説かれている。真実と娑婆と、この二つを明らかにして、真の仏弟子ということを示すのが親鸞聖人の『教行信証』ですから、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』はわかりますね。『大経』は第十八願に当てます。『観経』は第十九願に当てます。二十願は『阿弥陀経』にあてます。だから一心帰命というときには『観経』と『大経』の問題、一心願生と言う時には、『大経』と『阿弥陀経』の問題、こんなふうになっていきます。

そしてさっき言ったように、「努力しなさい」まずそうです。「しっかり頑張れ」。僕らは頑張れと言っても頑張らないでしょう。途中でいい加減にやめます。「もう、だめだ、しんどいやめた」親鸞も頑張ったのです。法然も頑張ったのです。がんばったら必ず、自力では救われないというところまで行くのだから、お釈迦様は最初からそれを見ているのだから、出発点が違っているのだから、頑張ったら頑張って最後に殺し合いになる。わかっている。だから「やれ」と言っているのです。だけど僕らは中途半端だから、これ『痛いな』と思ったらやめます。ぶちっと千切れるほどやる人はあまりいない。それちょっと頭おかしい、頭がおかしい人しか分からないのかもしれない、と言ったらいけないですね。教えを聞いていたら分かります。

教えを聞いていたら分かります。苦勞したら分かるということもあるのですが、苦勞して分かるということもあります。高史明先生がよく言っていました「私は息子が自殺をして、初めて分かったのです。」と言ったら、聞いていた人が「先生、子供をなくすというような苦勞をしないと分からないのですか」と言われた。先生はどう答えたのですか、「苦勞ではなくて、その時に私には親鸞聖人の教えが届いたから分かったのであって、苦勞だけでは分からないのです」。それはそうです。苦勞だけで分かるのなら、いいかな、あまり不埒なことを言ったらいけないけれども、

木屋町のお姉ちゃんたちは多く苦勞しています。私よりも、だから苦勞だけで分かるのならば、苦勞した人が分かるはずです。ところが教がないから、苦勞の意味が分からない。だから教えを聞きなさい。教えを聞いておきなさい。苦勞をしなくても分かるから。そのうち死ぬから、そのうち死にます。自分で一番いやなことが起こるから、その時に苦しむ。それで分かるというふうに、お釈迦様はちゃんと『観経』は死ぬときに分かるを書いてある。

南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏を称えていたら頭の中がぐっとまわって、生まれたときに仏様のいのちを頂いて、仏様の世界を生きてきて、また仏様の世界に帰るのだと、これが事実だということが分かる。けど、今分かるというのが『大経』だから、第十九願で頑張って、『観経』で頑張って、だから『観経』は絶対に『大経』の本願に目覚めるための必要だから要門という。

『観経』は要門。そしてその要門を通して、弘願・『大経』の本願に目覚めなさい。いいかね、つまり、途中で終わっているのですだいたい。皆さん宗教体験をたぶん持っていますよ半分、自力無効ということが分かったら、「ああ、親鸞の言うことはそうだ」と思ったら、自力無効くらいは大病したら分かる。それを通して本願に目覚めないと本当の救いにならない。体験主義になるから、「あの時の体験に帰れば、分かるは」と言う話になる。そうすると、いつもいつも体験のところに帰えろとする。そうでなくて本願に目覚めたら、「今の救い」になる。今、いのちの底から本願が叫んでいる。それが欲望として苦しんでいる、「煩惱即菩提」、それが信心として分かる。だから、今の救になるのが本願の救いです。

体験主義になると思い出が変わる。だから昔分かったところに帰って、「そうそうそう」と理解しないとしょうがない。それは体験主義になる。そうでなくて、今救われるのです。今しか時間がない。今、本願と欲との関係、これに目覚めて、親鸞聖人の教えはありがたい、『大経』はありがたい、とこういうふうに『大経』の救いに立っていく。それをお釈迦様は『観経』と『阿弥陀経』と『大経』に依って明らかにしてくださった。

この世の化身土で明らかにしてくださったのは、お釈迦様の大悲なのです。こっち側の身体の覺りを明らかにしてくださったのは弥陀の大悲です。それは至心・信樂・欲生にある。こっちは『大経』・『観経』・『阿弥陀経』にある。こっちは化身土の卷の三経一異の問答、こっちは信の卷の三一問答。三一問答と化身土の卷は『教行信証』で見ると遠く離れているから、別のことだと思ってしまう。そうではない両方の足だと思ってください。そうでないと眞の仏弟子にならない。難しいですか、難しいことはひとつも言っていない。事実を言っているだけです。事実が分からないほどみんな頭がいいのだ。じゃあほんと事実が分からないほど頭がいいから、岡田先生なんて最たるもので、彼は京大出のバリバリやから、頭が良すぎるから訳が分からなくなるのです。

これを言わないと、南無阿弥陀仏と言うのは考えてあるのではないのです。私を救ったはたらきとしてしか南無阿弥陀仏はない。だからそれしか南無阿弥陀仏はないと始まっている。それを外して南無阿弥陀仏ですとこう言うのは、それは觀念論になる。親鸞に觀念論で言っている個所は一か所もない。全部自分の責任で言っているから、だからその辺がもしかしたら難しいのかもしれない。頭で考えるということを超えた事実だから。事実が分かった人にはものすごく簡単なことを言ってる。考える必要がないほどの事実なのです。15分過ぎちゃった。一応これで。質問をどうぞ。

質疑応答

質問者(垣本さん)・今日はいろいろと本当にありがとうございました。今日の『文類聚鈔』ですか。あれが往相回向のところ、結局、晩年の親鸞は実践的になったと、こうおっしゃったのですが、そうすると『文類聚鈔』のところは『教行信証』では化身土の巻のところは『文類聚鈔』なのですか。化身土というのは実践的、何ででしょうか。

先生・化身土と教・行・信・証があって、真仏土、化身土と展開していきますね。ですから、教・行・信・証というところがひとくくり、真仏土・化身土というところがひとくくり、というふうに、大きく言えば二つに分かれると思います。一応そう言うことです。そして教・行・信・証は、私たちの仏道になる行・信・証というところに立って、仏になる道に立った。これが「教」「行」「信」「証」の巻の一つの大きな課題ですね。

それとはちがって、今度は真仏土が扇の要になって、真仏土はこっち側の私たちが仏になる道を開くということと、もうひとつは真仏土がこの娑婆を照らして、この娑婆は全部自力だから、成り立たないよと言うことを証明するわけです。ややこしいことを質問しますね(笑)。あのね、教・行・信・証で例えば親鸞は救われて仏になる道に立ったわけです。それでいいわけです。普通はそれでいいですね。それは親鸞にとっては絶対的に真実だから、「私は本願力に依って仏になっていく。そして今、事実として、『大経』の教え、行信の南無阿弥陀仏、そして浄土の証を頂いた。私は救われたのだ、これでいいわけです。ですからそこまでは絶対真実を明らかにしている。そうですね。

ところが、例えば明恵が「そんなばかなことがあるか」と批判しました。「法然は救われたとか、仏になる道に立ったとか言っているが、凡夫がそんなことになるわけがない。それは神がかりか、独断だ」と。神秘主義か独断だと、こういうふうに批判されたどうしますか。それに答えようとしたところが化身土の巻だと考えられます。ですから、真仏土の巻が中心になって、真仏土というのは仏様の覚りそのもの。これが中心になって『教行信証』の絶対真実を成り立たせています。そうするとこっちだけだったら神秘主義か独断だと言われたら説明のしようがない。その時に、この世のどんなことも、仏道も生活も、生活と言うのは、例えば科学それから思想、例えば孔子の思想とか勝れた思想があります。そういう思想というものの全部が自力であって、成り立たないのだと。自力であって成り立たない、すべてが虚仮だということを証明し終わった時に絶対真実が絶対真実であるということを發揮する。こちら側は相対真実、相対的に全部が成り立たないと言うことを証明したら、何も言わなくてもこちら側が真実であるということを証明したことになる。そういう手法を『教行信証』はとっているために、『教行信証』と言う絶対真実を表すところと、化身土という相対真実を表す二つに大きく分けて、分かれると思います。

だから『文類聚鈔』の方は、ここまで言う必要はなかった。『教行信証』に書いているから、とかダイジェスト版だから、実に短くしているから、だから『文類聚鈔』の方は絶対真実の方を中心に明らかにしていて、『教行信証』のように相対真実を明らかにするところは『教行信証』に譲ったと考えてもいいと思います。

どうしても分からなかったら、お手紙を書いて「化身土も書かないと分からないではないか」

と「075の親鸞・親鸞」に電話をしてください。『文類聚鈔』は、今言ったように絶対真実を明確にして、ひとつはさっき言った法然への回帰が一番大きな主題ですから、だからこちら側の行信ということを中心に、行の中に信を納めて、行だけでいいと主張しているのが『文類聚鈔』です。だからそこに主眼があるから、相対的はあえて言わなかったと。

質問者(垣本さん)・・・はい分かりました。ありがとうございました。

先生・・・今のところ分かってくださったらありがたい。つまり『文類聚鈔』は信を立ててないのです。行の中に信を納めて教・行・証で書かれている。それは、信を言うと「親鸞はまた信を言っているのではないか」と、こういうふうになるから。ということは法然への回帰、法然の仏教で十分なのだと言おうとするところに主眼があるために、これは聖道門に対して言っている。そういう課題があるから、そういうふうになっているのだと思います。

質問者(岡田さん)・・・私はもうちょっと入門編の質問を。さっき「信心」ということについて、体験主義ではよくないというお話がございました。体験主義はよくないけれども、つまり「あの時のことを思い出して」とか言うことですね、過去のことですね。しかし事実に基づかない信心というものもない。というお話があったと思います。

先生・・・逆に言うと体験のない信心はないということですね。

質問者(岡田さん)・・・体験と事実の違いですね。それでもっと言えば、その事実がいかにして普遍化されるのかと言うことです。そういう問題かなと思うのですね。今度は私の経験ですが、善知識を通さないと自分の照らし出されるということの、どどのつまりが留め金が打てない。

先生・・・分かったちょっと待って、もう言いたいこと分かった。つまり善知識に遇わないと仏教は、真宗という仏教は実現しないね。それは、そこに他力という意味があります。自分の自力をずっと伸ばして行って到達してしまうと仏教になりません。そうではなくて善知識に依って、初めて仏様の世界知らされるということは、善知識がないと絶対に真宗は分からないと言うのは他力の仏教だからです。ひとつは。だから体験ということを通して、善知識に遇うということを通して初めて明らかになりますよ。これは正しい。そこまでは正しい。それを善知識に遇うということを通して分かりますよと書いてあるのが『観経』だと思ってください。

ところが善知識に遇って、教えが私に届いたという時には、それは実は本願の成就なのですよと説いているのが『大経』。だから『観経』の方に傾くと体験主義になるから、その体験を通して実は本願の成就なのですよというところまで行ってください。そうでないと親鸞の仏教が分からなくなる。体験主義になって、本の先生に遇った時のところまで帰らないと仏教が分からないということになる。そうでなくて本願の成就なのだと言っているのが『大経』です。だから善知識と遇ったという体験から言えばそうです。しかしそれは本願の成就なのですというふうに説かれているのが『大経』だから、本願の成就というのはどういうことかということをよく考えて自分のものにしてください。そうしたら先生と遇った時のところに帰らなくても分かるように

なるから、ということを書いたかったわけです。

質問者(岡田さん)・・・そこをもっと詳しく。

先生・・・僕はずっと言っているのではないか(笑)、本願の成就、本願の成就というのはいのちの底から、「なんか言っているでしょう」と、それが何かということが解けた。それが本願の成就だからね。だから、一生懸命言っているつもりだけど、と言うか、それはやっぱり一人ひとりの体験を通して、一人ひとりの本願の成就を確かめる。それしかないのです。だから、僕は自分で確かめたことを言っているだけで、皆さん一人ひとりに全部当てはまるよとは言わない。それはしょうがない、皆さんひとり一人違うから分かり方をする人もいるかもしれないから。それはそれでいい。しかし、『大経』には本願の成就と同じことを『観経』では善知識に会う。『大経』では本願の成就と説いている。だから『歎異抄』では「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」(第二章)と書いてある。これは『観経』に依っているから。ところが『教行信証』では善知識との出遇いなどは書かれてない。本願の成就というところからしか始まらない。それは『大経』に依るからです。その辺をよく考えてください。先生に遇ったことを、岡田先生の言い方からすると、本願の成就というところまで普遍化してください。それは僕の仕事ではありません。

質問者(岡田さん)・・・十分答えを頂いたと思います。

田畑先生・・・ありがとうございました。一応これで終わりたいと思います。最後に久保さんがひとこと。

久保善道さん・・・質問ではないのですが、この場をお借りして一言お礼を申し上げたいと思います。実は先月家内が亡くなりまして、長い間、延塚先生、田畑先生、それから円徳寺様、この『教行信証』に学ぶ会の皆様方には是非お礼を申し上げたいと思います。

大峯顯先生の「花咲けば 命ひとつと いうことを」という俳句がありますけれども、以前はそれほど深く考えたこともなかったのですが、このたび家内を亡くしまして、ああ、花咲けば、花を花たらしめていたいのちの尊さというものをつくづく感じております。本当に長いことお世話になりました。

田畑先生・・・それでは終わりたいと思います。恩徳讃を最後によろしくお願いします。

(恩徳讃、終了)

テープ起こし、文章化：安達洋太郎さん

添削：田畑正久先生、住職

2023/5/6 原本受信。2023/5/19. 1回目田畑添削。

2023/6/1 岡田氏の添削と聖典の記録を付して2回目の添削。